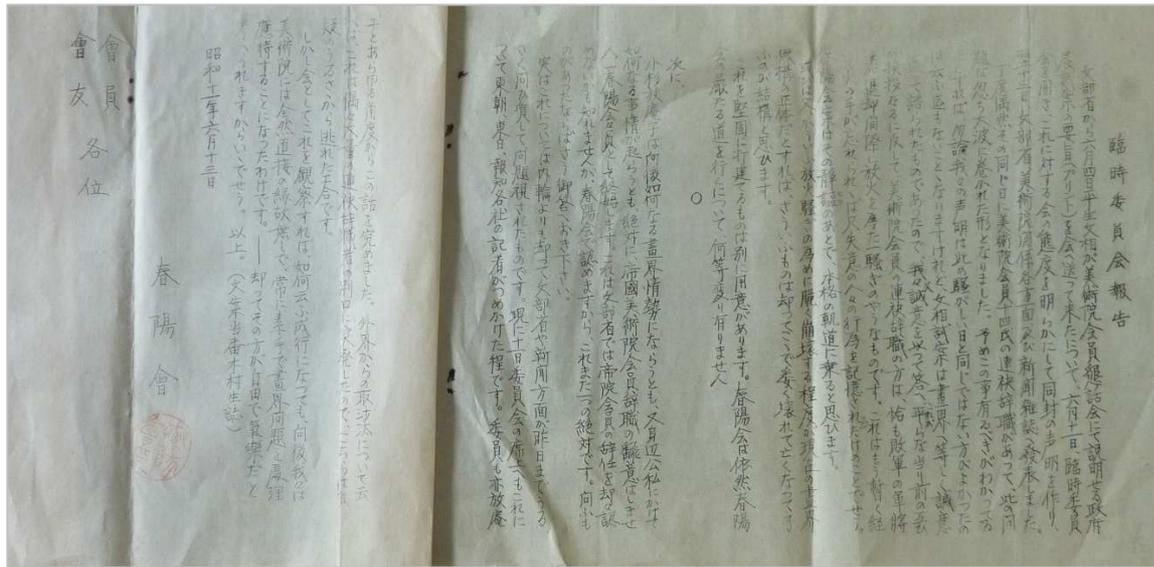


〔臨時委員会報告〕



臨時委員会報告

文部省から六月四日、平生文相が美術院会員懇話会にて説明せる政府展試案の要旨(プリント)を送つて来たことについて、六月十一日、臨時委員会を開き、これに対する会の態度を明らかにして声明を作り、翌十二日、

文部省、美術院関係各方面及び、新聞雑誌へ発表しました。

丁度偶然その同じ日に、美術院会員十四氏の連袂辞職があつて、此の問題は忽ち大波に大波に巻かれた形となりました。予めこの事有るべきがわかつてゐたとすれば、勿論我々の声明は此の騒がしい日と同じではない方がよかつたのは云ふ迄もないこととなりますけれども、文相試案は畫界へ等しく誠意を以つて語られたものであつたので、我々又誠意を以つて答へ、これが平らな当り前の互ひの挨拶なるに反して、美術院会員の連袂辞職の方は、恰も敗軍の軍將達が退却間に放火を為した一騒ぎのやうなものです。これはもう暫く経て火の手が忘れられれば、只失意の人々の行為を記憶されるだけのことでせう。春陽会案はその静謐のあとで、本格的軌道に乗ると思ひます。

或ひは又、かういふ放火騒ぎの為に脆く崩壊する程度が現在の畫界機構の正体だとすれば、さういふものは却つてここで悉く壊れて無くなつて了ふのが結構と思ひます。

これを堅固に打建てるものは別に用意がありません。春陽会は依然春陽会の嚴たる道を行くについて、何等変りありません。

次に、

○
小杉放庵子は向後如何なる畫界情勢にならうとも、又身辺公私にかけて如何なる事情が起らうとも、絶対に、帝国美術院会員辭職の翻意はしません、春陽会会員として終始します。これは文部省では帝国美術院会員の辞任を却々認めないかも知れませんが、春陽会で認めますから、これまた一つの絶対です。問うふものがあつたならばさう御答へおき下さい。

実はこれについては、内輪よりも却つて文部省や新聞各方面が昨日まで煩く問ひ質して問題視されたものです。現に十一日、委員会の席上へもこれについて、東京朝日、東京日日、報知各社の記者がつめかけた程です。委員も亦放庵子とあらゆる角度からこの話を究めました。外界からの取沙汰について云へば、これは偶々大量の連袂辭職者の別口に突発したので、こちらは質疑のうるささから逃れた具合です。

しかし、会としてこれを觀察すれば、如何云ふ成行になつても、向後我々は美術院には全然直接の縁故無しで、常に素手で畫界問題を処理対応することになつたわけです。——却つてその方が自由で氣楽だと考へられますからいいでせう。以上。

(文案当番木村生誌)

昭和十一年六月十三日

春陽会(印)

会員 会友 各位